

[10] 関連病院の施設紹介・留学記

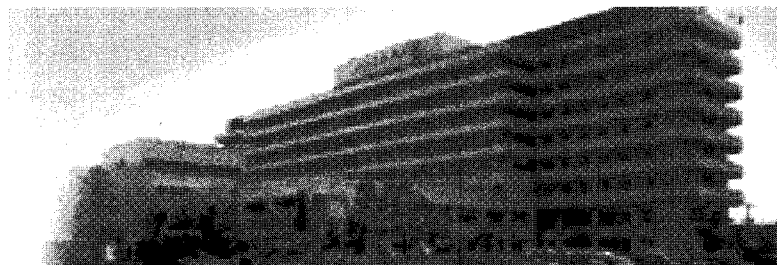
施設紹介

富山市民病院

富山市民病院は、昭和 20 年 8 月 1 日の大空襲により、全富山市が壊滅した、その翌年の昭和 21 年 2 月に、富山市の保健衛生施設として、大手町に創設されました。その後、昭和 29 年に五福に分院が開設され、昭和 58 年に本・分院を統合して現在の新病院となっています。国道 41 号線沿いの交通の便が良い場所に立地しています。地域中核総合病院として、市民の保健・医療・福祉を担っています。日本内科学会認定専門医教育病院、日本神経学会準教育施設、日本脳卒中学会認定研修教育病院など、各種研修認定も受けています。

神経内科は、医師 2 人で、内科の 1 部門として診療に携わっています。専門外来、脳ドックの他、内科一般業務として、日中救急、富山市輪番救急なども分担しています。病棟は、脳神経外科との混合病棟で、病床数は約 20 床です。脳血管障害が多く、脳神経外科と協力しながら、診療にあたっています。意識障害、頭痛、めまいなど救急外来からの呼び出しも多く、神経救急医としての役割も重要です。

(文責：林 茂)



富山市民病院のホームページ<http://www.tch.toyama.toyama.jp/>も、ご参照下さい。

独立行政法人 国立病院機構 北 陸 病 院

当院は金沢市に隣接する富山県南砺市にあります。国道 27 号線が整備され、金沢大学角間キャンパスから片道 25km、自動車で 30 分、自転車で 70 分の距離となり、医師の多くは、金沢市から通勤しています。現在の病院全体の入院病床は 254 床で、そのうち神経難病病棟は 40 床です。平成 26 年 5 月に 4 階建ての精神科病棟が開棟し、大きな混乱もなくスムーズに移転作業が行われました。病室は新しく広くなり、患者様も快適に過ごされています。なお平成 27 年 4 月には神経難病と重症心身障害者の新病棟が完成し、移転する予定です。それに伴い、神経難病病棟は 50 床に増床となる予定です。

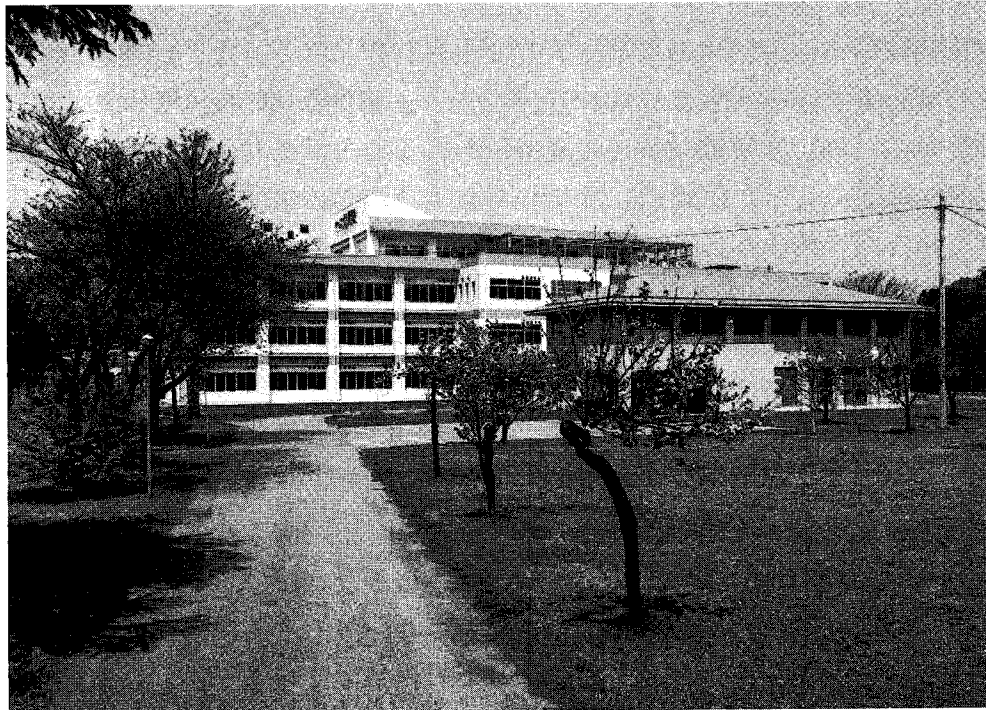
本年度は地域医療連携に力を入れて参りました。平成 20 年、当院に神経内科が加わりましたが、未だ認知度が低いため、今年度はソーシャルワーカーを中心として近隣の総合病院や医院に挨拶に伺いました。その際、遺伝カウンセリングを含めた神経内科の紹介や認知症疾患医療センターの案内を行いました。そこで、各先生方の意見を伺い、富山県内には神経難病を長期に受け入れることができる施設は少なく、当院に対する期待が非常に大きいことがわかりました。また、これまでにご要望のありました人工呼吸器を装着された神経難病患者の受け入れについては、当直される精神科医の理解を得るべくミーティングを重ね、平成 27 年度より対応ができるように準備を進めております。人工呼吸器装着患者の受け入れについては患者様の安全が第一であり、数か月に渡りスタッフの勉強会を行ってきました。神経内科医と呼吸器内科医 1 人で力を合わせて、患者さまに少しでもお役に立てるようにならばと思っています。今後は、リハビリを徐々に充実させ、脳血管障害後遺症の患者さまの受け入れも予定しております。

今年度のうれしいニュースとしましては、横浜で開催された第 68 回国立病院総合医学会において、当院から 14 演題のエントリーがあり、2 つのベストポスター賞と 2 つのベスト口演賞を当院スタッフが受賞するという前代未聞の快挙がありました。また、病院の評価を医療面と経営面で評価する国立病院機構本部による評価実績 (AA、A、A⁺、B、C) において、昨年度の評価が AA になりました。平成 22 年度までは、毎年 B 評価でしたが、平成 23 年度から評価が A⁺ となり、平成 25 年度は、A 評価を飛び越えてしまいました。今後は、新しい病棟建設の借入金の返済義務が生じて、より一層経営努力が必要となりますが、この勢いを継続し、建物だけでなく、私自身も進化していかなければならないと感じております。

当院では、神経難病のみならず、認知症プロフェッショナルを目指す大学院生にとって、診療と研究を両立できる良い環境が整いつつあります。今後とも御指導御鞭撻のほど、宜しく願い申し上げます。

(文責：小竹泰子)

<南新病棟>



平成25年度 病院評価結果

評価	点数	一般病床中心			障害・精神・複合(その他)			施設数	
		500床以上	350床以上	349床以下	障害者中心	精神中心	複合(その他)		
AA	99		○					1 病院	22 病院
	96	○						1 病院	
	94			○				1 病院	
	93		○					1 病院	
	92						○	1 病院	
	91				○		○	2 病院	
	90	○			○○			3 病院	
	89		○			○	○	3 病院	
	88		○				○	2 病院	
	87	○○	○			⇒	○	5 病院	
86						○○	2 病院		
A	85		○○○		○		○	5 病院	23 病院
	84	○		○	○○		○	5 病院	
	82	○○	○○		○○○○○		○	9 病院	
	81	○		○	○		○	4 病院	
A'	80		○		○		○	3 病院	35 病院
	79	○●	○○		○○○	○		8 病院	
	78	○		●	○○○○○○○	○○	○○○	15 病院	
	77			○	○○			3 病院	
	76		○○		○	○○	○	6 病院	
	75				○	○		2 病院	61 病院
	74	○	○	○	○○		○	7 病院	

公 立 能 登 総 合 病 院

公立能登総合病院は平成 25 年度に七尾市と鹿島郡の広域圏事務組合の病院から七尾市病院事業が運営する自治体病院に生まれ変わりました。診療科 24 科で診療を行っています。病床数は 330 床程度であり、常勤医 45 名、研修医 3 名ですが、医師不足のため、非常勤医が当直業務にあたることもあり、三次救急病院としての機能を維持することが困難になりつつあるように思います。精神センター（100 床程度、精神科常勤医 5 名）が隣接しております。神経内科については脳外科、さらに、お隣の恵寿総合病院の神経内科、脳外科の先生方と一緒に、脳神経輪番を組み、奥能登～羽咋市までの能登地方全域の脳血管障害をはじめとした、急性期神経疾患患者の診療にあたっています。

外来は月曜から金曜まで毎日行っていますが、毎週木曜に大学から高橋良一先生に応援に来ていただいております。平成 23 年 6 月より事業管理者、病院長、医局の先生方の許可をいただき、神経内科外来を完全予約制と致しました。救急患者については対応可能であれば診療にあたり、余裕がなければ脳外科、内科の先生方をお願いしている状況です。15-20 人の再診患者を午前中に診察し、新患者については午後 1 人 45 分枠で 3 人程度まで予約診察しています。再診患者の待ち時間が短縮できたこと、新患に 45 分程度の診察時間を割くことができ、余裕を持って診療に当たれるようになったのがメリットのように思います。平成 23 年 9 月から、開業医の先生方から紹介の物忘れ患者について、神経内科、脳外科、精神科の持ち回りで物忘れ専門外来として、月 2 回 4 名程度の診療にあたっています。

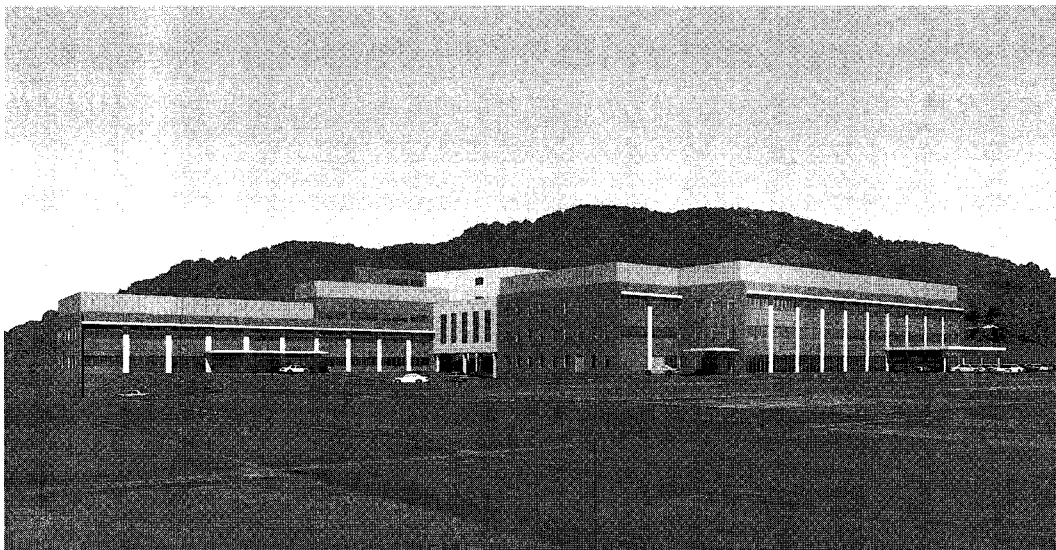
入院は定数 17 床で、患者数は 12-15 人前後の事が多いです。対象疾患は、脳血管障害(手術適応のない脳出血やクモ膜下出血も含む)がほとんどです。この他、木曜日午前は隔週で訪問診療(ALS 2 名と脳幹出血後遺症 1 名 計 3 名全員がレス管理)を行っております。また、公立病院であるため、田鶴浜高校看護科の講義、市民講座、七尾市医師会の講演会といった仕事も時として入ります。こうした状況のため、変性疾患や筋疾患、炎症性疾患等の精査加療については、大学や県中、金沢医科大病院を始めとした他病院の先生方に御協力いただいている次第です。入院患者の転院については慢性期脳血管障害については恵寿病院の回復期リハビリ病棟、輪島病院や穴水病院等の紹介元の病院にお願いすることが多く、変性疾患の慢性期の治療・管理については七尾病院の横地先生にお世話になっております。院内の雰囲気としては、脳外科医師、コメディカル、パラメディカルの方々が非常に協力的で、配慮してくれるので、神経内科医 1 人でも何とか破綻せずに診療業務にあたっています。

(文責：室石豊輝)

独立行政法人 国立病院機構 医王病院

医王病院は金沢市の東端森本インターチェンジのそばに位置しています。山の麓にあるため病棟から時々カモシカを見ることがもできます。当院は神経難病と重症心身症児、筋ジストロフィーなどを専門にしており小児科と神経内科がメインとなっています。神経内科は駒井副院長以下6名で診療を行っています。大学病院を除くと6名の配置は多いように思われますが、それでもかなり忙しくまだまだ人員不足です。当院も大学とは違った立ち位置で診療、研究、および教育・地域の貢献に力を入れています。診療部門の特徴としては、人工呼吸器装着患者など重症患者が多いことがあげられます。難病患者の在宅診療、呼吸ケアサポートチームや栄養管理チームとのチーム医療も積極的に行っています。また小児神経と神経内科の遺伝専門医がいることで小児から成人までの幅広い神経系の遺伝カウンセリングを行えることも特徴です。さらに神経難病の緩和ケアチームも発足し活動しています。研究面では積極的に病理解剖を行う病院として病理研究や国立病院機構の共同研究、院内臨床研究、帰学日を利用した基礎研究と幅広く行っています。病理解剖は本年もすでに10例を超えています。発症前診断を含む遺伝子検査も一部行っています。当院発の論文も本年はすでに英語論文5本以上となっています。教育・地域医療面では金沢大学医学部の学生実習を受け入れているほか県の難病医療センターや医師会からの講演依頼、院内の看護師さん対象のレクチャーなどを引き受けています。また、当院の研修システムですでに遺伝専門医、リハビリテーション専門医、病理解剖などの資格取得に成功しています。以上ひと昔前ののんびりとした慢性期病院のイメージとは懸け離れたものとなっておりかなり忙しい日々を送っています。医局の若い医師に医王病院で学びたいと思ってもらえるように今後とも頑張っていくつもりです。

(文責：高橋和也)



弘前大学大学院医学研究科脳神経病理学講座 留学記

博士課程 3年 中村桂子

2014年4月から、大学院生として弘前大学大学院医学研究科脳神経病理学講座へ国内留学させて頂いております。早いもので、こちらに来てからはや1年近く経とうとしております。

まず大学のある弘前市を簡単にご紹介いたします。弘前市は青森県の西部、津軽地方に位置する人口約17万9千人の町で、弘前城を中心としたかつての城下町です。今も弘前城周辺では、春は桜まつり、夏はねふた祭り、秋には菊と紅葉まつりなど、季節毎に伝統的なお祭りが行われ賑わいます。市の北西部には県の主峰である岩木山が見えます。独立峰でかつ柔らかなシルエットの岩木山は、美しい女性のような印象を受けます。岩木山嶺から津軽平野にかけては、りんご畑がゆったりと広がります。弘前市はりんごの生産量日本一の町です。量も然ることながら、品種も豊富で、ざっと20品種以上はあります。また、津軽が生んだ文豪は何人もおりますが、中でも太宰治が有名です。小説「津軽」を読んで実際の地を歩くのは、何とも味わい深いです。以上は弘前・津軽の魅力のごく一部です。弘前は伝統文化と自然を大切にす、素敵な町です。

次に講座をご紹介いたします。脳神経病理学講座は、若林教授はじめ3人のスタッフの先生方がいらっしゃる基礎講座です。1965年に当初脳卒中研究施設として開設された、歴史ある部門です。主に神経変性疾患を対象に、免疫組織化学の他、培養細胞、モデル動物等を使った幅広いアプローチで研究を行っておられ、また知識も豊富で、尊敬すべき先生方ばかりです。

こちらの講座へ留学させて頂いた理由として、①神経病理の勉強、②多系統萎縮症の研究、この2つを希望したことが挙げられます。神経病理には、入局当初から興味がありました。大学院では、これまでなかなか勉強できなかった中枢神経病理の勉強と、それを基にした研究を希望していたのですが、研究というものの具体的なイメージが湧かず、大学院2年目になってテーマを決めるのに大変悩みました。そのような時、山田教授から「自分が一生をかけて治したいと思う病気を選びなさい」とのアドバイスを頂き、それをきっかけに決定しました。

現在の私の活動ですが、まず月に3回前後、Brain cuttingに参加させて頂き、その病理診断書作成、免疫染色を行っております。Cuttingは実際行くと難しく、人一倍不器用な私は未だにしばしば断面が斜めになってしまい、冷や汗をかきます。症例は、他病院での病理解剖症例や法医学講座で行政解剖になった症例が中心です。行政解剖の症例の場合、元々疾患が診断されている場合もあるのですが、生前はただ「認知症」とだけ診断されていた例であったり、偶発的に変性疾患が見つかる場合もあつたりします。また、外傷や脳出血など、なかなか神経内科単独では見るこ

とのできない症例も受け持つことができ、大変勉強になります。個々の症例は、標本をじっくり丁寧に見て、所見を若林教授に確認して頂き、理解できていない点をフィードバックして頂いております。4月から何例も受け持ちましたが、いかに自分が勉強不足であったか、病態を理解することがいかに大切であるか、そして基本となる HE 染色がいかに大切であるか、ということを経験痛感します。どんな症例からでも学べることは沢山あり、自ら貪欲に学ばないと、と自身に言い聞かせております。

研究面では、パーキンソン病や多系統萎縮症の封入体を対象にいくつかテーマを頂き、免疫染色やウェスタンブロットを使いながら研究をさせて頂いております。研究素人の私に、先生方は方法や手順、考え方など、お忙しい中一から丁寧に御指導して下さい、本当に感謝しております。今はまだ目の前の標本を見て、考え、次の計画を立てるという流れに付いて行くのにただただ必死な状態ですが、何か見つけてそれが新知見だと知ったときは嬉しく、しかもそれを基に研究させて頂けるのはとても幸せなことだと感じております。自分で考えて計画を立てられるよう、少しでも早く成長したいものです。

以上、留学先での模様を簡単にお伝えさせて頂きました。

最後になりましたが、研究や仕事での熱心な御指導のみならず生活面でも多々アドバイスを下さる、講座の先生方や実験補助ならびに事務のスタッフの皆様には、心から感謝申し上げます。そしてこのような素晴らしい研究・勉強の機会を与えて下さった山田教授はじめ医局の先生方に、深く御礼申し上げます。2年間という短い期間ではありますが、科学者としての考え方や知識を出来る限り身に付け、還元すること、それがお世話になった方々への最大の恩返しだと思い、邁進したいと思います。



脳神経病理学講座のスタッフの皆様です。前列左から丹治先生、若林先生、森先生、後列左から三木先生、小野さん、中田さん、私です。

[1 1] 金沢大学大学院脳老化・神経病態学（神経内科学） および金沢大学附属病院神経内科名簿

（2014年1月から12月）

教授	山田正仁
保健管理センター教授	吉川弘明
准教授	岩佐和夫
講師（3月まで医局長、4月から外来医長）	小野賢二郎
助教（3月まで病棟医長、4月から医局長）	濱口毅
助教（4月から病棟医長）	坂井健二
助教（3月まで外来医長）	篠原もえ子
特任助教（医学教育研究センター）	佐村木美晴
特任助教	野崎一朗
医員	森永章義（3月まで）
医員	島啓介（4月から）
医員・大学院博士課程	池田芳久（3月まで）
医員・大学院博士課程	高橋良一
大学院博士課程	赤木明生（愛知医科大学）
医員・大学院博士課程	小松潤史
医員・大学院博士課程	中村桂子（3月まで、4月から弘前大学）
医員・大学院博士課程	柴田修太郎（4月から）
医員	山口浩輝（3月まで）
医員	中野博人（4月から）
医員	島綾乃（4月から）
医員	尾崎太郎（4月から）
大学院博士課程・心理士（研究員）	堂本千晶
研修医	中野博人（1-3月）
研修医	尾崎太郎（1-3月）
研修医	島綾乃（1-3月）
研修医	林幸司（1-3月）
研修医	坂下泰浩（1-3月）
研修医	村松大輝（4-6月）
研修医	木谷佐央理（7月）
研修医	熊谷泉那（7月）
研修医	辻大祐（8月）
研修医	加瀬希奈（12月）

クリニカルクラークシップ	柳 田 成 史 (4-5月)
クリニカルクラークシップ	釜 蓋 明 輝 (5-6月)
クリニカルクラークシップ	曾我部 志 乃 (5-6月)
クリニカルクラークシップ	中 井 文 香 (5-6月)
名誉教授・非常勤講師	高 守 正 治
非常勤講師	垣 塚 彰 (京都大学教授)
非常勤講師・協力研究員	吉 田 光 宏 (国立病院機構北陸病院)
臨床教授・協力研究員	駒 井 清 暢
臨床准教授・協力研究員	新 田 永 俊
臨床准教授・協力研究員	石 田 千 穂
臨床講師・協力研究員	坂 尻 顕 一
臨床講師	山 口 和 由
臨床講師・協力研究員	松 本 泰 子
臨床講師・診察協力医・協力研究員	高 橋 和 也
診察協力医	小 竹 泰 子
協力研究員	横 地 英 博
協力研究員	丸 田 高 広
協力研究員	古 川 裕
協力研究員	本 崎 裕 子
協力研究員	池 田 篤 平
協力研究員	能 登 大 介
協力研究員	枝 廣 茂 樹
協力研究員	小 林 星 太
検査技師	角 田 由美子
検査技師	後 藤 律 子
検査技師	齊 藤 翔 子 (6月から)
検査技師	本 田 美 幸 (6月から)
臨床心理士 (研究員)	柚 木 颯 偲
心理士	丹 羽 こず絵
心理士	内 藤 友 香 (10月から)
教授秘書	辻 口 悦 子
事務員	米 原 洋 子
事務員	澤 田 和 子
事務員	中 田 理 砂
外来受付	蔵 谷 久 美

編集後記

私は今年から医局長となり、初めての仕事も色々あったのですが、これまでの医局長が残して下さった資料を見て、真似をしながら何とか務めて参りました。この年報の編集後記も、過去のもを真似して書けば大丈夫・・・と、安易に考えていましたが、過去の編集後記を読ませて頂き、その質の高さに驚きました。結局、書き始めたものの、全く進まず数週間が経過してしまいました。どれだけ考えても急に名文が書けるようになるわけもなく、諦めて書き始めた次第です。

2014年の当科の最も大きなニュースは、5人の新入医局員が加わったことです。5人とも个性的かつ魅力的な人ばかりで、皆で切磋琢磨して研鑽を積んでおり、既に英文論文の執筆も行うなど、学会・論文発表も積極的に行っており、非常に頼もしく思いました。2015年も3人の新入医局員が加わる予定で、今後もこの調子で若い人が活躍できる場所になるようにしていければと思います。

今年は、STAP細胞問題が大きく取り上げられ、科学研究に対する視線は益々厳しいものとなりました。ただ、当教室の主な研究テーマである認知症については、政府が認知症対策を重要課題に捉える姿勢を明確にしていることもあり、今年度は例年以上に研究費が獲得出来ました。研究費を獲得した以上は、その成果を要求されるわけで、今年度に新たに始まった大型プロジェクトもあり、この1年で一気に仕事量が増加したように思います。2015年3月の北陸新幹線開業に合わせて、金沢で開かれる全国学会、国際シンポジウムが次々と予定され、それらの準備も重なり、医局員だけでなく、事務員、技術補佐員、心理士など、医局関係者総出で、夜遅くまで頑張っています。今後、大きな成果が得られることを期待しています。

年報の編集にあたり十分校閲いたしましたが、誤字脱字・掲載漏れなどがあるかもしれません。これらの誤謬につきましてはこの場をかりてお詫び申し上げます。

最後に、山田教授を初め、年報編集において多大なるご協力をいただいた多くの皆様方に心より感謝申し上げます。

(医局長 濱口 毅)

金沢大学 神経内科 年報 第15号(2014)

2015年3月23日 発行

発行： 金沢大学大学院 医薬保健学総合研究科 脳医科学専攻
脳病態医学講座 脳老化・神経病態学(神経内科学)

〒920-8640 金沢市宝町13-1

TEL(076)265-2292 FAX(076)234-4253

<http://neurology.w3.kanazawa-u.ac.jp>

印刷： 株式会社中川印刷

金沢市浅野本町二167 TEL(076)252-6556
